

事例研究

エリートテニス選手における幼児期からの運動経験
ーインタビュー調査による検討ー

遠藤 愛（東京経済大学） 村上貴聡（東京理科大学） 平田大輔（専修大学）

A case study on the active play in childhood for elite tennis players
- Interview based approach -

Mana Endo (Tokyo Keizai University)
Kiso Murakami (Tokyo University of Science)
Daisuke Hirata (Senshu University)

Abstract

The purpose of this study was to gain an effective knowledge for developing an elite tennis player. To accomplish this, interviews were conducted with eleven world-class Japanese professional tennis players (4 male and 7 female). The author inquired about the athletes' experiences regarding exercise play, and sports during the developmental process. The questions included following, ① what kind of play did you do, ② what is your strongest memory of play, ③ what did you gain from exercise experience, ④ how did exercise experience in childhood have a positive impact on your tennis career.

The results of the interviews are that all players were immersed at an early age in exercise play (tag, hide and seek, etc) and sports (baseball, swimming, soccer, etc) with their neighborhood friends, brothers, and sisters. They had enjoyed playing, physical movements, and competing with friends. They developed not only fundamental motor skills but also the ability to play tennis through considerable exercise experience. Furthermore, they felt to be able to improve an understanding of themselves by playing sports with friends, and they developed an attitude as an athlete through experiences of challenge, competition, victory or defeat.

Consequently, players received many physical and psychological benefits from their exercise experience in childhood. These benefits have a profound influence on their career as professional tennis players. It is necessary that to train and develop an elite tennis player, children should be given sufficient exercise experience including challenge, competition, victory or defeat since childhood.

Key Word: growth development, exercise experience, retrospective analysis

1. はじめに

一流の競技者を育成するためには、発育発達過程において、子どもたちが生来持つ体力・運動能力を刺激し、発達させることが必要不可欠である。また、各競技種目においては、野球の場合は、バッティングにおいて投手の投げたボールを正確に捉え強く打ち返すこと、ピッチングにおいては球種を変えながら正確に投げるものが求めら

れる（吉野・杉山、2007）。サッカーの場合は、足を使ったさまざまなキックで正確にボールをコントロールする技術や持久力、瞬発力が必要である（大橋、1991）。そして、テニス競技は、テニスコートという限定された空間の中で相手のショットに対応して動くこと、試合時間が定められていないこと、ラケットという道具を用いてオーバーヘッドやグラウンドストローク、ネット

プレーなどの多彩なショットを打たなくてはならないという特徴がある。そのために、基礎としての筋力、持久力、柔軟性、敏捷性、平衡性といった体力要素にくわえ、短い距離を前後左右方向に自在に動くフットワーク技術や、狙ったコースに正確なショットを打つヒッティング技術を習得しなくてはならない（日本テニス協会編、2005）。

マイネル（1981）、三木（1990）は、運動の急速な発達をみせる就学前の1歳から5歳の幼児期に多様な運動経験をもち、見た運動に共感できる能力を発達させた上で、新しい運動経過を素早く把握・習得できる最適学習期である9歳から12歳の間にスポーツ専門化をはかることが望ましいと述べている。また、宮丸（1986）、Gallahue（2010）、宮下（2010）は、自立移動が安定して自由になる2歳頃から小学校低学年までの運動経験がその後のスポーツ運動の学習能力に大きな影響を及ぼし、この時期に獲得する運動発達の水準が将来のスポーツ達成力の礎石となることなどを指摘している。このように、将来、優れた競技者となるためには、動きの習得が著しい、あるいは神経系の体力である調整力の発達が著しい幼児期から小学校低学年の間に、走る、跳ぶ、投げる、打つ、捕る、蹴る、転がる、泳ぐ、漕ぐといった動作や、ボールなどの道具を使いこなして遊ぶといった多彩な運動遊びに挑戦し、成功や失敗を繰り返しながら、多面的な運動形態を習得することが重要である（小林ほか、1990；吉田、2008）。それゆえ、優れた体力・運動能力とともに上述のようにコート上で自由自在にフットワークを操り、また多彩なショットを放つことのできるエリートテニス選手を育成するためには、いかにしてこの時期に様々な運動経験をさせるかということが重要な鍵を握ることになる。しかし、昨今の日本における子どもたちの生活環境は、機械化・省力化が進んでいること、安全な遊び場の確保が困難であること、遊びが多様化していることなどの理由から、幼児期から児童期にかけての遊びに質的変化や量的減少が生じている（國本、2003）。こうした遊びに見られる変化は、子どもたちの基礎的な

体力・運動能力が低下する現状を引き起こしている（木塚、2010；國本、2003）。

このような状況の中で一流のテニス選手を育成するためには、実際に世界レベルで活動した経験を有するテニス選手が、それぞれの幼児期から児童期において、誰と、どこで、どのような運動・運動遊び、スポーツを行っていたのかについて調査し、後のプレイスタイルにどのような影響を及ぼしているのかを検討することが有効であると考えられる。

そこで本研究では、世界レベルの活動経験を有する日本人テニス選手に、幼児期から児童期の運動・運動遊び、スポーツ経験についてインタビュー調査し、どのような特徴や共通点が見られるのか、また、それらの運動経験がその後のテニス選手としてのキャリアにどのような影響を及ぼしているのかなどについて明らかにすることにより、日本独自のエリートテニス選手育成のための有効な知見を得ることを目的とした。なお、本研究では、1歳から6歳を幼児期、小学校入学後の6歳から12歳を児童期と区分し（浅見、1983）、調査を進めた。また、運動は歩く、走るなどの全身運動を、運動遊びは鬼ごっこ、かくれんぼなど「遊びの中で活発に身体を動かすことに重点をおいた活動（岸本、2009）」を示し、これらの運動・運動遊び、スポーツの経験をまとめて運動経験と示すこととした。

2. 研究方法

（1）調査対象者

調査対象者は、シングルスにおいて、世界ランキング100位以内およびグランドスラム大会本戦への出場経験、もしくは全日本選手権での複数の優勝経験を有する日本人テニス選手（男子4名、女子7名）とした。なお、表1に調査対象者の特性をまとめた。

（2）調査方法

インタビュー調査については、調査者と対象者の1対1による半構造化面接（2時間程度）を行った。本調査における対象者への倫理的配慮につい

表 1 調査対象者の特性

対象者	生年月日	テニス開始年齢	プロ選手としての活動期間	世界ランキング最高位 (年)	主な戦績
A	1947/11/23	9 歳	21 ～ 27 歳 *	75 位 (1973 年)	全豪 2R、全仏・全英・全米 3R
B	1957/6/22	9 歳	20 ～ 32 歳	177 位 (1983 年)	77 ～ 79,81,83,85,88 年 全日本選手権優勝
C	1967/11/6	7 歳	21 ～ 30 歳	46 位 (1992 年)	全英ベスト 8
D	1989/12/29	5 歳	17 歳～現在	4 位 (2015 年)	全豪ベスト 8、全仏ベスト 8、全英 4R、全米 準優勝
a	1959/11/11	12 歳	23 歳～ 34 歳	89 位 (1985 年)	全豪・全仏 3R、全英・全米 2R
b	1964/10/18	8 歳	17 歳～ 26 歳	26 位 (1988 年)	全豪・全英 3R、全仏・全米 2R
c	1971/11/22	7 歳	18 歳～ 25 歳	24 位 (1995 年)	全豪・全英・全米 3R、全仏 1R
d	1973/3/23	1 歳	17 歳～ 25 歳	14 位 (1995 年)	全豪ベスト 8、全仏・全英 4R、全米 3R
e	1974/2/22	7 歳	17 歳～ 24 歳	28 位 (1995 年)	全豪・全仏 4R、全英・全米 2R
f	1975/7/5	5 歳	17 歳～ 34 歳	8 位 (2004 年)	全豪・全英ベスト 8、全仏・全米 4R
g	1990/3/11	7 歳	15 歳～現在	40 位 (2011 年)	全豪 3R、全英 2R、全仏・全米 1R

注 1 A ～ D は男子選手を、a ～ g は女子選手を示す。

注 2 R は、トーナメントのラウンドを示す。例) 3R : 3 回戦

注 3 * A 氏はアマチュア選手として競技活動を行った。

ては、本研究の目的とともに、インタビュー調査で得た結果を研究以外の目的に利用しないこと、インタビュー調査の過程で明らかになった個人情報著者が責任を持って管理すること、研究結果の公表では対象者が特定されないことなどを事前説明し、全ての選手の了承を得た上で、協力してもらった。

(3) 調査内容

インタビュー調査における質問項目は、資料 1 に示した通りである。家族構成、家族の運動経験、対象者自身の幼児期から児童期における運動・運動遊び、スポーツの経験についてであった。運動・運動遊び、スポーツについては、親しんだきっかけや誰と、どこで、どのように行っていたのか、それぞれの経験の中でどのようなところが楽しかったのか、あるいは印象に残っているのか、さらにこれらの運動経験から何を学んだのか、そして運動における自分自身の特徴について尋ねた。また、テニスについては、テニスを始めた経緯や初めてテニスをしたときの印象、自身のプレイスタイルの特徴、幼児期から児童期にかけての運動経験がテニス選手としてのキャリアに及ぼした影響などについて尋ねた。プレーの時間や

頻度についても、記憶している範囲での回答を求めた。

(4) 分析

本研究の調査対象者らは、幼児期に育った環境やテニスを始めてからプロ選手になるまでのトレーニング環境が異なっている選手達である。しかし、全員が世界レベルで活動経験を有していることから、選手らの幼児期から児童期における運動経験に何らかの共通点を明らかにすることは、エリートテニス選手育成のための重要な知見を得ることができる。そこで、各選手の幼児期から児童期における運動経験を調査した上でそこに認められる共通点を見だし、その内容についてレトロスペクティブな検討を加えた。分析に際しては、調査対象者はすでにプロテニス選手として実績を挙げていること、本人の記憶に基づく研究であることを考慮し、結果に対して可能な限りバイアスを排除して客観的な検討を加えるように留意した。そのために、インタビュー内容についての整理・検討は調査対象者と同レベルの競技経験を有するスポーツ運動学の専門家 1 名、コーチング学の専門家 1 名、そしてスポーツ心理学の専門家 1 名の計 3 名の作業者によって行なった。3 名の作

資料1 インタビューにおける質問項目

1. 家族構成と家族の運動経験について教えてください。
2. 運動・運動遊びの経験について
 - (1) 幼児期（小学校に入る前まで）の運動・運動遊び経験について教えてください。
 - ① 幼児期には誰と、どこで、どのような運動・運動遊びをして遊んでいましたか？
 - ② 遊び時間や頻度を覚えていたら教えてください。
 - ③ 家族は運動・運動遊びについてどのような考え、態度でしたか？
 - ④ 運動・運動遊びの中でどのようなことが面白かったですか？
 - ⑤ 得意・不得意な運動・運動遊びは何でしたか？どういったことが得意で、どういったことが不得意だったか覚えていますか？覚えていたら内容を教えてください。
 - ⑥ 運動・運動遊びの中で特に印象に残っていること、心に残っていることがあれば詳しく教えてください。
 - (2) 児童期（小学校）の運動遊び、スポーツの経験について
 - ① 児童期の時は、誰と、どこで、どのような運動遊び、スポーツをしていましたか？
 - ② 時間や頻度を覚えていたら教えてください。
 - ③ 家族は運動遊びやスポーツについてどのような考え、態度でしたか？
 - ④ 運動遊び、スポーツではどのようなことが面白かったですか？
 - ⑤ 得意・不得意な運動遊び、スポーツは何でしたか？どういったことが得意で、どういったことが不得意だったか覚えていますか？覚えていたら内容を教えてください。
 - ⑥ 運動遊び、スポーツの中で特に印象に残っていることがありますか？
 - (3) テニスへの導入について
 - ① テニスを始めたきっかけを教えてください（(3) と重複する可能性があります）。
 - ② テニスをした時の印象を覚えていれば教えてください。
 - ③ テニスをしていた環境（練習環境や指導者など）を教えてください。
 - ④ 家族はテニスをすることにに対してどのような態度でしたか？
 - ⑤ あなたはどのようなプレーをしていましたか？
3. 幼児期から児童期にかけての運動・運動遊び、スポーツの経験から何を学んだのかについて
 - (1) 自分の運動に見られる特徴は何でしたか？（体力面、心理面にみられる特徴を教えてください）
 - (2) 運動・運動遊び、およびスポーツの経験から何を学びましたか？
 - ① 体力面
 - ② 心理面
4. テニス選手として
 - (1) テニス選手としての自分をどのように分析しますか（プレースタイル、体力面、心理面にみられる特徴など）。
 - (2) 運動・運動遊び、およびスポーツの経験はテニスプレーヤーとしてのキャリアにどのような影響を及ぼしていると思いますか？子ども時代の運動経験のどのような点がテニスプレーヤーとして競技者として活動していく上でどのように影響したと考えますか？どこに影響しているのか、それがどのように役立ったのかなど、体力面や心理面について可能な限り具体的に教えてください。
 - (3) テニス選手として世界レベルで活動できた（できている）要因は何だと考えていますか？

業者は全員がテニスの指導経験を有している。まず、幼児期においてどのような運動・運動遊び、スポーツの経験を有していたのか、次に、それらの経験が後のテニス選手としてのプレースタイルにどのように影響を及ぼしているのかなどについて、2名の分析者により内容分析を行った。その後、報告された内容について分析者間でチェックを行い、意見が一致するまで内容を議論して得られた結果を残りの1名の分析者によって再度吟味した。さらに選手のプレースタイルについては、

選手自身の回答に加えて選手の活動を報じた新聞記事を参考にした。

3. 結 果

(1) 幼児期から児童期における運動・運動遊び、スポーツの内容について

表2に、対象者の家族のスポーツ経験、主な遊び場・遊び相手、運動遊びへの導入、およびテニスへの導入について示した。対象者の家族には必ずスポーツ経験者がいること、主な遊び相手は家

表2 対象者の家族のスポーツ経験、主な遊び場・遊び相手、運動遊びへの導入、およびテニスへの導入

対象者	家族のスポーツ経験	主な遊び場	主な遊び相手(性別)	運動遊びへの導入	テニスへの導入
A	兄:野球	近所の公園、空き地	兄、近所の友達(男子)	二人の兄と自然に外遊びをしていた。	自宅にラケットがあった
B	父:柔道、母:バレーボール、兄:野球 テニス	自宅の庭、近所の空き地、公園	兄、近所の友達(男子)	自宅の庭が広く、自然にそこが遊び場になった。	兄がテニスをやっていた
C	父:テニス、兄姉:水泳、テニス	公園、山、海、川	兄、姉	兄姉と自然に外遊びをしていた。	姉がテニスをやっていた
D	両親、姉:テニス	公園	姉、近所の友達(男子)	とにかく体を使った遊びが大好きで自然に外遊びをしていた。	家族がテニスをやっていた
a	父、弟:野球	公園	父、弟、近所の友達(男子)	テレビは1日30分の約束で、外遊びをするしかなかった。 近所にとても広い公園があり、休日になると父がキャッチボールをしてくれた。	進学した中学がテニスの強豪校だった
b	母:テニス	公園	母、近所の友達(男子)	母自身がピッチャーをやるなどして率先して外遊びを促し、一緒に遊んでくれた。	母親がテニスをやっていた
c	父:山登り、兄:水泳	公園、山、海、川	兄	父が山登りやキャンプによく連れて行ってくれた。兄達と自然に外遊びに親しんだ。	母親がテニスをやっていた
d	祖父、叔母、両親:テニス	自宅の庭、公園	弟	ゲームは1日30分以内という約束もあったが、とにかく外遊びが面白かった。庭が広かったので、弟と木登りやサッカー、野球などをして遊んだ。	家族がテニスをやっていた
e	母:テニス	公園	姉、近所の友達(男子)	姉や近所の男の子達と自然に外遊びをしていた。	母親がテニスをやっていた
f	母:スキー	公園、海、山	母	母が一对一で外遊びをしてくれた。赤ちゃんの時から母に抱っこされてスキーを滑り、夏は近所の海で遊んでいた。	家族がテニスをやっていた
g	両親:テニス、弟:野球	公園	弟、近所の友達(男子)	外遊び、野球が大好きで弟や近所の男の子達と外遊びばかりしていた。	家族がテニスをやっていた

族（全員：親、兄弟姉妹）、近所の友達（7名）であること、女子選手の遊び相手は7名中6名が男子であること、遊び場は全員が近所の公園であり、この他に自宅の庭、山、海などの回答も見られた。運動遊びへの導入については、選手A, C, c, e, gは「兄弟姉妹と自然に外遊びに親しんでいた」、選手a, fは「親が積極的に外遊びに連れて行ってくれた」、選手bは「母自身がピッチャーをやるなど、率先して外遊びを促し、一緒に遊んでくれた」、選手B, dは「自宅の庭が広く、自然に運動遊びに親しむようになった」、選手Dは「とにかく体を使った運動遊びが楽しかったから外で遊んでいた」とそれぞれ回答した。また、家庭の中でテレビ（選手a）やゲーム（選手d）の時間を

30分以内に定め、外遊びを促す例も見られた。テニスへの導入理由については、選手Aは「自宅にラケットがあった」や選手aは「進学した中学校が強豪校であった」と述べたが、それ以外の全ての選手については家族のいずれかがテニスに親しんでいたことが明らかとなった。

表3には、幼児期と児童期の運動・運動遊び、スポーツの内容、スポーツに費やした頻度と時間、および競技としてテニスを始めた時期について年齢ごとに示した。なお、選手C, c, d以外は3歳以降の記憶しか示すことができなかった。幼児期から児童期の運動・運動遊びについては、鬼ごっこ7名、かくれんぼ6名、缶蹴り5名の順に多かった。この他にも、木登り、虫捕り、鉄棒、

表3 幼児期と児童期の運動・運動遊び、スポーツの内容

	3～4歳	5～6歳	7～8歳	9歳～10歳	11歳～12歳	13歳～
選手A	缶蹴り、木登り、セミ捕り、トンボ捕り、相撲	→	野球(ピッチャー、4番)、ドッジボール、サッカーなど 放課後、毎日約3時間	テニス(遊び)	テニス(競技) 毎日3.4時間	
選手B	鬼ごっこ、かくれんぼ、缶蹴り、木登り、セミ捕り	→	ドッジボール、三角野球 野球6年生の秋まで(4, 5年サード、6年4番投手) 毎日3時間	テニス(遊び)	テニス(競技) 10歳～12歳 週2日 2時間 13歳: 毎日3.4時間	
選手C	水泳(遊び) 2歳～	→ 水泳	鬼ごっこ、かくれんぼ、山、海、川遊び ドッジボール、キャッチボールなど	テニス(遊び) 週1日(2時間程度)	テニス(競技) 毎日2～3時間	
選手D	水泳(遊び)	→ 鬼ごっこ、縄跳び、鉄棒、滑り台、竹馬	水泳	サッカー(競技)	テニス(競技) 毎日2.3時間	
選手a	鬼ごっこ、かくれんぼ、缶蹴り	→ キャッチボール、野球に似た遊び	野球(投手と1塁手)	テニス(競技) 毎日3時間		
選手b	自転車、ローラースケート	→ 鬼ごっこ、かくれんぼ、竹馬、缶蹴り	野球、ドッジボール	テニス(競技) 平日: 1時間、土日: 1日練習		
選手c	さまざまな外遊び 水泳(遊び) 2歳～	→ 山登り、キャッチボール テニス(遊び) 週1日	水泳: 週5日	テニス(競技) 平日: 4時間、土日: 1日		
選手d	スキー、サッカー	→ 水泳 鬼ごっこ、かくれんぼ、竹馬、木登り	ドッジボール、バドミントン、キックベースボール、野球	テニス(遊び) 1歳～	テニス(競技) 5-9歳: 毎日2時間、10歳以降: 毎日2時間半	
選手e	鬼ごっこ、缶蹴り、かくれんぼ、木登り、鉄棒	→ テニス(遊び)	かけっこ、ドッジボール	テニス(競技) 毎日2時間		
選手f	海、スキー遊び	→ 器械体操、クラシックバレエ、フィギュアスケート	ゴム跳び、縄跳び、丸太橋、鉄棒、マット運動	テニス(競技) 週5日: 2時間程度		
選手g	野球、サッカー	→ 輪車 さまざまな外遊び 野球・水泳	テニス(遊び)	テニス(競技) 8歳以降: 週6日 2時間半		
注 各線は以下の内容を示した。 → 運動遊び、スポーツ(遊び) → スポーツ → テニス(遊び) → テニス(競技)						

キャッチボール、竹馬や、海、川、山での遊びなども挙げられた。スポーツについては、野球、ドッジボールがそれぞれ6名、水泳5名、サッカー4名、その他にもローラースケート、自転車、スキー、相撲、フィギュアスケート、クラシックバレエなどが見られた。運動・運動遊び、スポーツに費やした時間や頻度については、全員が3歳以前から運動・運動遊びに親しんでおり、「幼稚園から帰って日が暮れるまで毎日外遊びをしていた」と述べていた。児童期についても「放課後は毎日遊んでいた」と述べていたが、明確な時間についての回答は得られなかった。本研究の調査対象者の年齢は最大で43歳の差があり、それぞれが育った社会的、時代的背景や生活環境は異なっていたが、全員が3歳以前から運動・運動遊び、スポーツに親しんでおり、その内容は鬼ごっこ、かくれんぼ、野球、サッカーなど、今日においても子どもたちに広く親しまれているものであった。

テニスの開始年齢については、遊びで始めた年齢・競技に移行した年齢を以下に整理した。選手Aは9歳・12歳、選手Bは9歳・10歳、選手Cは7歳・10歳、選手Dは5歳・6歳、選手aは12歳で競技としてテニスを始めた。選手bは8歳・10歳、選手cは7歳・10歳、選手dは1歳・5歳、選手eは7歳・8歳、選手fは5歳・7歳、選手gは7歳・8歳であった。このことから選手A, aは12歳から、その他の選手は10歳以前から競技としてテニスに取り組んでいたことが明らかになった。また、練習時間については、選手fの週5日、選手gの週6日以外は毎日行っていたと回答し、1日の練習時間は選手bが平日に1時間、土日に1日中という以外は、全員が1日2時間以上の練習を行っていた。

表4には、幼児期と児童期の運動・運動遊び、スポーツ経験の中で、それぞれ得意、不得意な種目とどういった点が得意、不得意であったのかその内容について尋ねた結果をまとめた。幼児期の運動・運動遊びにおいては、選手fの「身体が硬かった」以外は、全員が不得意な内容を挙げな

かった。児童期のスポーツ経験においては、不得意なスポーツは選手B, C, cは短距離を、選手d, eは長距離を挙げた。得意な種目については全員が明示した。

(2) 幼児期から児童期における運動・運動遊び、スポーツ経験において印象に残っていることについて

幼児期と児童期にどのような気持ちで運動・運動遊び、スポーツを行っていたのか、面白かったことや特に印象に残っていることなどについて尋ねた。得られた結果は以下の通りである。なお、その印象を抱いた年齢を記憶している場合にはその年齢も示した。

1) 幼児期の運動・運動遊びについての印象および感想

運動・運動遊びにおいてどのようなことが面白かったのか、特に印象に残っていることについて尋ねた結果は以下の通りであった。

- ・ 体を動かすこと自体が楽しかった（選手C, a, f, g）。
- ・ 木登りで高いところに登った時の爽快感やワクワク感を鮮明に覚えている（選手B: 3歳頃）。
- ・ 様々なものに自分の身体を使って挑戦する遊びが楽しかった（選手d）。
- ・ 木登りでより高いところへ登る挑戦が楽しかった（選手A, B: 3歳頃, 選手d: 4歳頃）。
- ・ 鬼ごっこであっても徹底して勝敗を追求し、いかにして相手の裏をかくかを工夫し、挑んでいた（選手C）。
- ・ かくれんぼなどで負けても悔しくてたまらなかったのが絶対に負けたくなかった（選手D: 4歳頃）。
- ・ どんな遊びでも絶対に負けたくないという気持ちが強かった（選手b）。
- ・ 遊びの中でも勝つために考えて行動していた（選手e）。
- ・ 自分たちでルールや遊びを工夫することが面白かった（選手B, c）。
- ・ 遊びを通して新しい自分を発見することに

表 4 幼児期と児童期の運動・運動遊び、スポーツ経験における得意、不得意種目について

質問項目 対象者	幼児期の運動・運動遊びの経験について			児童期のスポーツ経験について		
	得意・不得意な運動・運動遊びは何でしたか？		どういったことが得意で、 どういったことが不得意でしたか？	得意・不得意なスポーツは何でしたか？		どういったことが得意で、 どういったことが不得意でしたか？
	得意	不得意		得意	不得意	
A	・木登り ・トンボ捕り	なし	トンボ捕りは名人だった	走・跳・投・泳・登・打・蹴・全 て。短距離、長距離	なし	握力も強く相撲も得意
B	木登り	記憶にない	身軽で、高い木でもこわくな かった	ドッジボール、野球	短距離	投打が得意 バランス感覚に優れる
C	水泳	なし	相手の裏をかくことが得意	短距離以外は 全般的に得意	短距離	駆け引きが得意 勝負になると強い
D	身体を使った遊び全般	なし	なし	サッカー	なし	ボールとの一体感がある
a	外遊び全般が得意	なし	投げるのが得意	走・投・泳・登・打	跳	肩や手首が強く、 特に野球が得意
b	何でも	なし	特に竹馬、ローラースケート が得意だった	野球	なし	野球の打撃でコースを自在に 打ち分けられる
c	水泳、キャッチボール	なし	体力はあった	水泳、長距離 体操	短距離、自転車、 ダンス系	柔軟性と持久力に自信
d	外遊び全般	なし	ボールを扱うこと、敏捷性が あった	球技全般、陸上系(短距離)	長距離	特に反復横跳びが得意
e	鉄棒	なし	特に動きが素早かった	短距離	長距離、水泳	敏捷性、瞬発力に自信がある が、体力はない
f	外遊び全般が得意	なし	身体が硬かった	マット運動 (倒立前転、バク転)	柔軟性が少し苦手	体力とバランスに自信
g	野球	なし	なし	野球、一輪車	なし	バランス感覚がある

胸が躍った（選手b）。

2) 幼児期と児童期のスポーツについての印象および感想

スポーツ経験においてどのようなことが面白かったのか、特に印象に残っていることについて尋ねた結果は以下の通りであった。

- ・ 野球でより速いボールを投げることへの挑戦が面白かった（選手b, g: 5歳頃、選手B, a: 9歳頃）
- ・ 負けることが大嫌いでとても悔しい反面、勝つことがとても嬉しかったし、楽しかった（選手D, b, c, e）。
- ・ 勝負の駆け引きが楽しかった（選手B, C, a,

b, g）。

- ・ これだけは人に絶対に負けないものがあるということが誇らしかった（選手A, a）。
- ・ 自分が目標としていた距離を泳ぎきった時はとても嬉しかったし、勝ち負けも楽しかった（選手c: 6歳頃から）。

以上の叙述から、幼児期からの運動経験においては対象者の間に以下のような共通点が認められた。8名が「楽しかった」と回答し、「体を動かすこと自体が楽しかった（選手C, a, f, g）」「木登りでより高いところへ登る挑戦が楽しかった（選手A, B, d）」という回答もみられた。その一方で「挑戦（選手A, B, a, b, d, g）」「駆け引きや工夫（選手

B, C, a, b, e, g)」「負ける悔しさ、勝つ楽しさ（選手D, b, c, e)」といった回答が複数みられた。運動経験への印象については、「木登りで高いところに登った時のワクワク感（選手B)」「遊びを通して新しい自分を発見することに胸が躍った（選手b)」「これだけは人に絶対負けないものがあることが誇らしかった（選手A, a)」などを挙げた。

(3) 幼児期と児童期の運動経験において印象に残ったことが後の競技にどのように影響を及ぼしたと考えているのかについて

表5には、幼児期と児童期における運動経験に

おいて印象に残っていることが後の競技にどのように影響を及ぼしたと考えているのかについて尋ねた結果をまとめた。

対象者らは、「勝負を体験することによって負けないために工夫すること（選手A, B, C, d, e）、努力すること（選手A, c, e）、我慢すること（選手B, c, d）を学んだ」と回答した。また、「駆け引きを楽しんだ（選手B, a, g)」「駆け引きの重要性を学んだ（選手b)」「勝つことに充実感を感じた（選手A, c)」といった回答もみられた。これらの結果からエリート選手らは、幼児期と児童期におい

表5 幼児期と児童期の運動経験において競技に関連する内容として心に残っていること

対象者	競技に関連する内容と思われること
A	幼児期の運動遊びを通して ・「負ける」感覚を学び、絶対に負けたくないという気持ち、負けず嫌いがさらに強くなった。 6歳からの野球を通して ・努力した結果として勝利を収めることに、とても充実感を感じた。 ・自分で工夫して遊びやスポーツに取り組む姿勢を学んだ。
B	9歳からの野球を通して ・野球を通して、勝負の駆け引き、バッターとピッチャーの読み合いが面白かった。 ・それまでの傾向を考えながら、自分の望む流れになるまで我慢して時を待つことを学んだ。 ・自然を味方につける工夫をした。
C	幼児期の運動遊び、スポーツを通して ・遊びの中で失敗しながら、成功するため、勝つために必要なことを考え、工夫したり、知恵を絞ったりする楽しさを知った。 ・遊び全体を通して、自分の置かれた状況を理解しながら、「相手の心を読むこと」、「諦めないこと」、「工夫すること」、「本気でやること」を学んだ。 ・相手の表情を見ながら次の動きや狙いを予測していた。
D	幼児期の運動遊び、5歳からのサッカーを通して ・負けることを経験し、自分の負けず嫌いに益々磨きがかかった。
a	幼児期からの運動・運動遊びを通して ・体を動かす楽しさを知った。 幼児期からの運動遊びを通して ・相手の動き、心理を読む、駆け引きが好きだった。 ・勝負とは何か、競争の楽しさを学んだ。
b	幼児期からの運動遊びを通して ・勝ち負けを経験する中で、どんな遊びでも絶対に負けたくないという強い気持ちが培われていった。 ・勝つために、相手の心理を読み、駆け引きをする重要性を知った。
c	2歳からの水泳を通して ・スポーツに打ち込むこと、努力すれば結果が出るのが楽しかった。勝ち負けも楽しかった。 ・子ども心に充実感、達成感を感じていた。 ・自分の時が来るまで我慢することを学んだ。
d	幼児期からの運動・運動遊びを通して ・思い通りにならない自然の中で遊ぶことによって、工夫する楽しさ、我慢することを学んだ。
e	6歳からの運動遊び・スポーツを通して ・むやみに動くのではなく、遊びの中で、勝つため、自分の目的を達成するためにどうするべきかを考えて行動することを学んだ。 ・勝敗を経験し、絶対に負けたくない、負けないために努力する、工夫することを学んだ。
f	幼児期からの運動・運動遊び、スポーツを通して ・思い切り体を動かしながら遊んでいたけれど、一方で、体を動かしながらも頭を使って冷静に考えて行動する重要性も学んだ。
g	幼児期からの運動・運動遊び、スポーツを通して ・勝負の駆け引きの面白さと、勝った時の喜びを知ることができた。

て仲間とともに運動に親しみ、競争や勝ち負けを経験し、自分の目標を達成するための工夫、知恵を絞ることの必要性、努力することの大切さ、勝負の駆け引きや競争の面白さを感じていた可能性が示された。

(4) 幼児期から児童期における運動経験に対する主観的評価、およびテニス選手としてのプレースタイルに及ぼした影響について

表6-1および表6-2に、幼児期から児童期における運動経験に対する主観的評価と運動経験を通して対象者らが自覚した自分の特徴、さらにプレースタイルへの影響とプレースタイルの特徴をまとめた。多くの対象者が、「運動経験を通して

将来的にテニス選手として必要な基礎的体力がこの時期に鍛えられたと思う（選手A, B, C, a, b, c, f）」と述べていた。

野球経験者は「手首、背筋（選手A, a）、肩（選手A, C, a, b, g）が鍛えられた」「身のこなしが身に付いた（選手A）」「投動作を習得した（選手A, C, a, g）」「打撃動作を習得した（選手B, a, b）」と回答した。また「野球の投動作はサービス、スマッシュに、打撃動作はヒッティング動作につながった（選手A, B, C, a, b, g）」と述べた。ボール遊び、野球、ドッジボール、サッカーなどの球技全般を通しては、「敏捷性を養った（選手D, d, e）」「ボールを操る感覚を習得した（選手D, a, d）」「ボール

表 6-1 幼児期から児童期における運動経験に対する主観的評価、自覚した自分の特徴、プレースタイルへの影響、プレースタイルの特徴（男子選手）

対象者	主観的評価	自覚した自分の特徴	プレースタイルへの影響	プレースタイルの特徴
A	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・基礎体力がついた。 <u>6歳からの野球経験</u> ・投動作や打撃動作から身のこなし、背筋、肩、手首が鍛えられ、投げる技術も身に付いた。	<u>幼児期からの遊び</u> ・トンボ採りの名人であり、間合いを計ること、道筋を読んで捕まえることが得意だった。 <u>幼児期からの運動遊び、6歳からの野球を通して</u> ・握力がとても強い。	・トンボ採りの間合いがヒッティング動作につながっている。 ・背筋、手首、肩の強さがラケット面を支え、正確なリターン技術の習得に貢献している。	・サービス、サービスリターン、攻撃的なグラウンドストロークが武器 ・ゲーム運びが得意
B	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・基礎体力がついた。 ・木登りでバランス感覚を培った。 <u>9歳からの野球</u> ・野球の打撃動作で球をミートする技術を習得した。	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・足が速い。 ・バランス感覚に優れている。 <u>6歳からのスポーツ</u> ・背が低い、パワーがない。 ・考えてプレーすることが得意だった。	・トレーニングに取り組むために必要な基礎的な体力が養われた。 ・身のこなしやバランス感覚を習得した。 ・野球でのミート感覚がヒッティング動作に貢献している。	軽快なフットワークと緩急のあるグラウンドストロークが武器
C	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・体を動かす基本を学んだ。 ・競技者として戦うために必要な基礎体力を養った。 ・ボール投げなどの投動作を通して、肩の使い方を学び、強い肩を手に入れた。	<u>幼児期の運動遊び</u> ・足が速い。 ・相手の心理を読むことと勝負の駆け引きが得意だった。 ・ずる賢い。 <u>7歳からのスポーツ</u> ・身長が高い。 ・テニスの才能はない。	・トレーニングに取り組むために必要な基礎的な体力が養われた。 ・投動作の習得がサービスに貢献した。	サービスが武器
D	<u>幼児期からの運動・運動遊びやサッカー</u> ・自分の体をうまく使ってボールを操ること、ボールに反応することを覚えた。 ・動きのスピード(敏捷性)やボールに対する感覚が磨かれた。	<u>幼児期の運動遊び、5歳からのサッカー</u> ・ボールとの一体感やボールを操る感覚に優れていた。	ボールと一体になる独特の感覚を磨いた	フォアハンドが武器

表 6-2 幼児期から児童期における運動経験に対する主観的評価、自覚した自分の特徴、プレースタイルへの影響、プレースタイルの特徴（女子選手）

対象者	主観的評価	自覚した自分の特徴	プレースタイルへの影響	プレースタイルの特徴
a	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・基礎体力がついた。 <u>幼児期からの運動遊び・スポーツ</u> ・野球で様々なバウンドのボールを処理していたので、ボールを扱う感覚が身についた。ピッチャーで背筋、肩、手首が鍛えられ、投げる技術も習得できた。バッティングで打つ感覚も習得できた。	<u>幼児期からの運動遊び</u> ・背筋や肩、手首がとても強い。	・トレーニングに取り組むために必要な基礎的な体力が養われた。 ・ボールを操る感覚に長けていた。 ・サーブが得意になった。	サーブとサービス&ボレーが武器
b	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・遊びの中で自然に基礎体力がついた <u>6歳からの野球</u> ・ボールを打つ感覚を養った。 ・肩が鍛えられた。	<u>幼児期からの運動遊び</u> ・体力がある。 ・動きが素早い。 <u>6歳からの野球経験</u> ・球のミート感覚が良い。	・体力に自信があった。 ・バッティング動作をヒッティング技術に応用し、コースの打ち分けが得意だった。	・安定したグラウンドストローク、ネットプレーが武器。 ・オールラウンドプレイヤー
c	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・基礎体力がついた。 <u>2歳からの水泳を通して</u> ・柔軟性、持久力が養われた。	<u>2歳からの水泳</u> ・柔軟性、持久力がある。 <u>6歳からのスポーツ</u> ・短距離、自転車に苦手で、リズム感もあまりない。・長距離が得意である	・体力に自信があった。 ・柔軟性がバランスに優れたヒッティング技術の習得に貢献した。	バックハンドとバッシングショット、安定したグラウンドストロークが武器。
d	<u>6歳からのスポーツ経験</u> ・サッカー、野球などの球技に親しみ、ボールを扱う感覚や反応を磨き、下半身も鍛えられた。 ・敏捷性を養った。	<u>幼児期からの運動遊び・スポーツ</u> ・長距離が苦手である。 ・短距離が得意、敏捷性に優れている。 ・下半身が強い。	・下半身が鍛えられ、安定したストローク技術を習得した。 ・ボールに対する反応や敏捷性に優れていた。	粘り強く相手のミス誘う安定したストロークが武器
e	<u>幼児期からの運動遊び</u> ・かけっこで瞬発力がついた。 <u>6歳からのスポーツ</u> ・ボールの使い方や素早い身のこなしが自然に身に付いた。	<u>6歳からの運動遊び・スポーツ</u> ・長距離、水泳が苦手でスタミナがない。 ・短距離が得意で瞬発力がある。 ・敏捷な動きができる。	・ボールに対する反応や敏捷性に優れていた。	攻撃型テニス
f	<u>幼児期からの運動・運動遊び</u> ・基礎体力がついた。 <u>幼児期からのスポーツ</u> ・色々な動きの習得や鍛錬に役立った。 ・柔軟性やバランス感覚が養われた。	<u>幼児期からの運動・運動遊び、スポーツ</u> ・柔軟性がない。 ・スタミナとバランス感覚がある。	・バランス感覚がよかった。 ・スタミナがあった。	安定したグラウンドストローク、スピード、迫力のある動きとバックハンドストレートが武器
g	<u>幼児期からの運動遊び・スポーツ</u> ・肩を鍛え、投げる技術も習得できた。 ・一輪車でバランス感覚を養った。	<u>幼児期からの運動・運動遊び、スポーツ</u> ・バランス感覚がある。	・肩の強さや肩の使い方がサーブ、スマッシュに役立った。 ・バランス感覚が両手両手打ちのスタイルに役立った。	両手打ちフォア、バックからの強打が武器

に対する反応を磨いた（選手D, d）」「下半身が強化された（選手d）」などの回答が得られた。

一方、選手B, f, g からは、「木登り、バレエ、一輪車などを通してバランス感覚を養った」との回答が得られた。

運動経験を通して自覚した自分の特徴については、「握力が強い（選手A）」「バランス感覚に優れている（選手B, f, g）」「動きが早い、敏捷性がある（選手b, d, e）」「スタミナがある（選手b, c, f）」「勝負の駆け引きが得意（選手B）」「ボールとの

一体感やボールを操る感覚に優れている（選手D）」「背筋、肩、手首が強い（選手a）」などの長所と「足が遅い（選手B, C）」「長距離が苦手、スタミナがない（選手d, e）」などの短所を挙げた。

幼児期からの運動経験がプレースタイルに及ぼした影響については、「背筋、手首、肩の強さがラケット面を支え、正確なりターン技術の習得に貢献している（選手A）」「ボールを操る感覚に長けていた（選手a）」「バッティング動作をヒッティング技術に応用し、コースの打ち分けが得意だった

た(選手b)」「バランス感覚が両方両手打ちのスタイルに役立った(選手g)」など、いずれの選手も自分のプレースタイルに影響を及ぼしていると回答した。

以上のことから、選手らは、幼児期から仲間とともに運動に親しみ、競争する中で、自分自身が他者と比較して優れている点や劣っている点に気づき、体格や体力・運動能力に見られる自分の特徴を認識していた可能性が示された。

4. 考 察

(1) 幼児期から児童期の運動経験による競技者としての土台の構築

エリートテニス選手に対するインタビュー調査から、選手らの育った時代背景は異なるものの、いくつかの共通点が認められた。対象者の家族のスポーツ経験や主な遊び場、遊び相手について尋ねた結果から、対象者らは、家族がスポーツに親しんでいたこと、体を動かして遊べる場所が近くにあったこと、家族が遊び相手であったことが共通していた(表2)。また、対象者らは幼児期より走る・跳ぶ・投げる・打つ・捕る・蹴る・泳ぐ・登るなど、多種多様な運動動作が内在している運動・運動遊び、スポーツに取り組んでいたことが明らかになった(表3)。さらに対象者らに幼児期からの運動経験において印象に残っていることを尋ねた結果、「木登りで高いところに登った時の爽快感やワクワク感を鮮明に覚えている(選手B)」「遊びを通して新しい自分を発見することに胸が躍った(選手b)」「これだけは絶対人に負けないものがあることが誇らしかった(選手A, a)」など、全員が心に残る出来事を報告した。宮丸(1986)は、「運動遊びが豊富な子どもは、運動技能の向上とともに運動遊びがさらに好きになり、運動遊びがより豊かになる」「(遊びの中で)心が揺さぶられる経験が重要である」と述べている。本研究の調査対象者となったエリート選手らは、幼児期から運動環境が整った生活環境にあり、様々な運動・運動遊び、スポーツに親しみながら「心が揺さぶられる」体験を繰り返していた可能

性がある。

また、幼児期から児童期の運動経験において競技に関連する内容として心に残っていることを尋ねた結果、「勝負を体験することによって負けないうために工夫すること(選手A, B, C, d, e)、努力すること(選手A, c, e)、我慢すること(選手B, c, d)、諦めないこと(選手C)を学んだ」「駆け引きを楽しんだ(選手B, a, g)」「駆け引きの重要性を学んだ(選手b)」「勝つことに充実感を感じた(選手A, c)」などの回答が得られた。このことは対象者らが幼児期から競争の要素がある運動経験を通して、競争や勝負に伴う嬉しさや悔しさ、充実感、達成感を体験しながら、目標を達成するために努力すること、我慢すること、工夫することなどの必要性を学んでいたことを示唆するものであろう。スポーツの現場においては、過去にインパクトのある体験が多い選手ほど努力することの大切さ、技術向上への気づきが高まることが報告されている(橋本、2012)。本研究の調査対象者らは、幼児期からの運動経験を通して、①身体を動かす楽しさや挑戦すること、②競争や勝負に伴う勝つ喜びと負ける悔しさ、③目標を達成するために努力、我慢、工夫することの大切さなどを体験し、学んでいたと考えられる。これらは対象者らの「心が揺さぶられる体験(宮丸、1986)」「インパクトのある体験(橋本、2012)」として、後に世界レベルで活動するテニス選手としての土台の一つになった可能性が示唆された。

しかし、幼児期からの運動経験において過剰に競争や勝負を意識することは、ジュニアスポーツの勝利至上主義や体罰問題を招き、子ども達の心身の疲弊や燃え尽き症候群を誘発する危険性を孕んでいる(滝口、2005)。一方でこうした過剰な競争主義を回避するために、自然に発生する競争や勝敗を排除する動きも認められる。本来、スポーツには、優劣、競争、勝敗が伴うものであり、子どもたちが取り組むスポーツに大人が介入し、過剰に競争を煽る、あるいは意図的に競争や勝敗を排除する行為は、子どもたちがすべきさまざまな経験の場を奪うことになるであろう。木塚

(2010) は昨今の生活環境を考慮し、子どもたちが安全に競える場や機会を大人が整える必要性を指摘している。今の子どもたちの体を動かす遊び時間を増やすことは困難かもしれないが、大人が家庭内のルールを定める、運動・運動遊びの面白さを伝えるきっかけを作るなど、子どもたちの豊富な運動経験を積ませる工夫をすることも必要であろう。

(2) 幼児期から児童期の運動経験を通しての個性の理解

筆者は、世界レベルで活動するためには、基礎技術を徹底的に習得し、それを土台として自分独自のプレーを築く必要性が常に競技者に求められていると考えている。そこで選手育成においては、幼児期から特別な運動経験を積ませるというよりも、まずは一般的な運動・運動遊びに幅広く触れ、多様な動きを身に付けながら自分に潜在している独自の才能を発掘し、その才能を最大限に生かした独自のプレースタイルの開発、習得が重要になると考えられる。

エリート選手らは、育った時代的背景は異なっても3歳以前から今日でも広く子どもたちに親しまれている一般的で多様な運動経験を積み、選手A, aは12歳、他の選手は10歳以前に競技としてテニスに取り組み、1日2時間以上のトレーニングを行っていた(表3)。また運動経験を通して他者との競争を経験していたことも明らかになった(表5)。選手らに得意・不得意な種目を尋ねた結果、全員が得意種目を明示し、不得意なスポーツとして選手B, C, cは短距離を、選手d, eは長距離を挙げた(表4)。幼児期からの運動経験に対する主観的評価や自覚した自分の特徴などについて調査した結果、選手らは運動経験を通して「敏捷性を養った(選手D, d, e)」「バランス感覚を養った(選手B, f, g)」など自らの運動能力を強化したことを、自分の特徴としては「体力がある(選手b, c, f)」「握力が強い(選手A)」などの長所や「足が遅い(選手B, C)」「スタミナがない(選手d, e)」などの短所を述べた(表6-1, 2)。さらに、幼児期から野球経験を有している選手らにプレー

スタイルの特徴を尋ねた結果、「サーブ力が高くゲーム運びが得意(選手A)」「緩急のあるストロークが武器(選手B)」「サービス、ボレーが武器(選手a)」「安定したストローク、ネットプレーが武器(選手b)」というように、同一競技の経験者であってもそれぞれが築いたプレースタイルは独自のものであった(表6-1, 2)。

このことから、選手らは運動経験を通して自らの個性を理解し、潜在している独自の才能を発掘し、その才能を刺激して自分の得意な運動や運動種目をさらに伸ばしていたと推測される。そして運動の最適学習期(マイネル, 1981; 三木, 1990)とされる12歳までに競技の専門化をはかり、1日2時間のトレーニングを行いながら独自のプレースタイルを築いた可能性が示唆された。一流選手になるためには、才能に恵まれること、幼児期からの豊富な運動経験を通して一般的な体力・運動能力を構築することに加えて、遊びを通して自らの個性を認識し、最適な時期に競技の専門化をはかった上で才能を開発、発展させていくことが必要であると考えられる。

(3) 幼児期から児童期における運動経験がテニス選手としてのプレースタイルに及ぼした影響について

エリートテニス選手に対するインタビュー調査を通して得た各選手の幼児期と児童期の運動経験が、選手のプレースタイルにどのような影響を及ぼしているのかについて、選手自身の回答(表6-1, 2)と選手を評価した新聞記事を用いて考察を進める。

選手Aは幼児期からの様々な運動・運動遊び、スポーツを通して基礎体力が構築され、児童期からの相撲や「野球経験で鍛えた背筋と手首、肩の強さ」を生かして「サービスとリターン、攻撃的なグラウンドストロークが武器」とするテニス選手としてプレーしたと振り返った。そのプレーは「サーブ力も高くゲーム運びもうまい(朝日新聞, 1971年4月)」と評価されていた。選手Bは、幼児期には一般的な運動・運動遊びや木登りを経験し、児童期からは野球に打ち込み、「木登りで

培った身のこなしやバランス感覚や野球経験で培ったミート感覚を生かして自分の足の遅さや体格のハンディを補うことができた」と述べた。選手Bのプレーは、「軽快なフットワークと安定したグラウンドストローク」「ストローク力がある（朝日新聞、1982年3月）」「緩急のあるストロークが武器（朝日新聞、1986年7月）」などと評価された。選手Cは、幼児期から運動・運動遊びとともに水泳にも親しみ、児童期からも様々な運動経験を通して「体を動かす基本を学んだ」と述べた。選手Cは特に「強烈なサービスを武器（朝日新聞、1995年7月5日）」と評価されていたが、これについては「ボール遊びで学んだ投動作と長身（188cm）を生かして築いた」と述べた。選手Dは、幼児期から鬼ごっこ、縄跳び、鉄棒、竹馬などの運動・運動遊びと水泳やサッカーに親しんでおり、特に「サッカーに親しみながらボールと一体になるという独自の感覚を身につけたことが独自のフォアハンドを築く土台になった」と述べた。選手Dは「フォアハンドが大きな武器」であるプレースタイルを築き、「余裕を持って放つフォアが強力。試合を読む力もあり、ベースラインでの打ち合いもうまい（朝日新聞、2008年6月）」と評価されている。選手aは、幼児期の鬼ごっこ、かくれんぼなどの一般的な運動・運動遊びを通して基礎体力を構築するとともに、父親や友人とのキャッチボールや野球遊びに親しみ、児童期には野球に積極的に取り組んだ。こうした野球に類似する運動遊び、スポーツ経験からオーバーハンドスローの投動作を、また様々なバウンドの処理によってボールを扱う感覚を身につけたようである。選手aは「子どもの頃の野球を通して手首と肩が鍛えられたことが大きい」と述べており、幼児期と児童期における野球経験はサービスに必要な運動連鎖や筋力を強化したと考えられ、その結果、「サービスとサービス&ボレーが得意」なプレースタイルを築き、実際に「得意のサービス（朝日新聞、1982年1月）」と「破壊力のあるボレー（朝日新聞、1987年12月）」を武器としたテニス選手として活動した。選手bは、幼児期からの「運

動・運動遊びで自然に基礎体力がついた」と語り、児童期には野球に積極的に取り組み、「球技に必要なヒッティング感覚について子ども時代のバッティング動作を通して培った」と振り返っていることから、球をミートする感覚をテニスのヒッティング技術に応用したと考えられる。選手bは自身のプレーについて「グラウンドストローク、サービス、ボレーができるオールラウンドなプレーヤー」と答えており、実際に「安定したストローク（朝日新聞、1982年12月）」「得意のネットプレー（朝日新聞、1983年10月）」をプレーの特徴として記されていた。選手cは、幼児期から運動・運動遊びだけでなく水泳にも積極的に取り組み、「柔軟性と持久力を鍛えた」と述べた。選手cは自身の弱点として「足が遅い」ことを挙げていた一方で「水泳で鍛えた持久力と柔軟性を生かして安定したグラウンドストローク、バックハンドの攻撃力、さらにスタミナに自信があった」と述べた。そのプレーは「パッシングショットが武器（朝日新聞、1995年7月2日）」と評価された。選手dは、幼児期から様々な運動・運動遊びに触れるとともに1歳からラケットを持って遊び、この他にスキーやサッカー、野球などにも親しんだようである。選手dは5歳から競技としてテニスに取り組んでいるが、「幼児期からの運動経験を通して下半身を強化し、ボールを扱う感覚や敏捷性を養った」、特に「サッカーで鍛えた下半身を生かして安定したスイングを習得」し、「粘り強いことが自分の持ち味である」と述べ、「相手のミスを誘う安定したグラウンドストローク（朝日新聞、1995年6月）」が特徴と評されたプレースタイルを築いた。選手eは、幼児期からさまざまな運動・運動遊びに親しみ、児童期からはかけっこやドッジボールが好きで、「ドッジボールやかけっこを通してボールに素早く反応する能力や瞬発力を磨いた」と述べた。選手eは「スタミナがない」ことが弱点であったが、瞬発力やボールに対する反応の良さを生かして「スピンをかけたフォアハンド」を武器とした「攻撃的テニス（朝日新聞、1995年1月）」と評されるプレースタイルを築い

た。選手fは、幼児期から一般的な運動・運動遊びに加えて、海やスキー遊び、器械体操、クラシックバレエ、フィギュアスケート、テニスなどさまざまなスポーツを行い、これらの経験が「基礎体力の構築や色々な動きの習得と鍛錬に役立った」と述べた。「バレエ、器械体操、スキーなどを通して身につけたバランス感覚と、多様な運動経験で鍛えられたスタミナが自分のプレイスタイルの土台となった」と回答したが、こうした特徴を生かして「安定したグラウンドストローク」や「スピード、迫力のある動き、バックハンドのストレートが武器（朝日新聞、1996年9月）」と評価されたプレイスタイルを築いた。選手gは、幼児期から様々な運動・運動遊びと野球、サッカーに親しみ、特に一輪車が得意であり階段の昇り降りもできたと述べた。選手gは「サッカーや野球で培った運動能力や一輪車で培ったバランス感覚が生きている」と述べた。特に「野球を通して肩を鍛え、投げる技術を身につけたことがテニスのサービスとスマッシュに役立った」「両方両手打ちのプレイスタイルに必要なバランス感覚は一輪車で培った」と述べた。選手gのプレイスタイルは、「両手打ちのフォア、バックからの強打（朝日新聞、2004年11月）」「自らポイントを取りに行く攻撃的スタイル（朝日新聞、2005年5月）」が特徴と評されていた。

本調査の対象者は、育った年代、社会的背景や生活環境はさまざまであった。しかし、全員が毎日の日常生活の中で、家族、友人らと日が暮れるまで身体を動かして遊び、その運動を楽しんでいたとの回答から、日常的に運動する習慣を身につけていた。そして、対象者らは幼児期から多様な運動・運動遊び、スポーツの経験を通して、持久力、手首や肩の強さ、敏捷性、バランス感覚の他に、ボールに対する反応やボールを扱う能力、柔軟性、身のこなしなどのスキルを獲得した可能性が考えられる。こうした幼児期から児童期にかけての運動経験を通してそれぞれが体力・運動能力を強化し、そのことがテニス選手としてのプレイスタイルに影響を及ぼしている可能性が示唆された。

5. まとめ

本研究では、世界レベルの活動経験を有する日本人テニス選手に、幼児期から児童期の運動経験についてインタビュー調査し、日本独自のエリートテニス選手育成のための有効な知見を得ることを目的とした。その結果、エリート選手らは育った時代や社会的背景は異なっているにもかかわらず、幼児期から児童期における運動経験において以下の共通点が認められた。

- ①生活の中で運動する環境が整っていたこと。
- ②3歳以前から一般的で多様な運動経験を積み、色々な運動動作を行っていたこと。
- ③運動経験を通して自らの特徴を理解し、印象に残ったことを明示したこと。
- ④競争の要素を持つ運動・運動遊び、スポーツを経験していたこと。
- ⑤幼児期からの運動経験が後の競技選手としての活動に影響を及ぼしていたと考えていること。
- ⑥選手A,a以外は10歳以前に競技テニスを始め、また全員が1日2時間以上の練習を行っていたこと。

これらの結果から、一流のテニス選手を育成するための一つの視点として、3歳以前から多様な運動経験を積み重ねること、その過程で自分自身の特徴や勝負への理解を深めて行く取り組みをすること、10歳以前に競技の専門化をはかり1日2時間以上の適切なトレーニングを実施することが、一般的な体力・運動能力の獲得に加えて、将来のテニス選手として活躍するために必要な能力の獲得など競技者としての土台を築き、さらには選手独自のプレイスタイルの開発・確立につながる可能性が示唆された。今回の調査結果は、エリートテニス選手における幼児期と児童期における運動・運動遊び、スポーツの様相が示され、今後の選手育成への参考資料となるのではないかと考えられる。

しかしながら本研究では、既に実績を出している特定のエリート選手を対象とし、本人の記憶と主観に対して検討を加えている。そのため、回答者自身が過去の経験を肯定的に処理したり、場合

によって事実と異なる形で主観的に再構成する場合もあるなど、本人から得た回答を客観的に評価することに限界があることは否定できない。また、幼児期からの運動経験が競技者にどのような影響を及ぼすのかをより明確に示すためには、運動・運動遊び、スポーツに親しんでいなかったグループとの比較も必要であろう。今後は幼児期からの運動・運動遊び、スポーツに親しんでいなかったグループとの比較や、運動に親しみながらも世界レベルで活動することができなかったグループとの比較検討を通して、さらにエリート選手育成のためには幼児期と児童期にどのような運動経験を持つことが必要なのかについて研究を進めることが重要であると考えられる。

付記

本研究は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 課題番号 21650164）を受けて実施された。

謝辞

本研究の実施に際しては、調査に快く協力してくださった一流競技者の皆様、貴重なご助言を頂いた筑波大学名誉教授高松薫先生に深く感謝し、厚くお礼申し上げます。

文献

- 朝日新聞(1971年4月24日付)オーストラリアデビスカップ監督 ニール・フレイザー談. p.21.
- 朝日新聞 (1982年3月5日付) p.17.
- 朝日新聞 (1986年7月19日付) p.18.
- 朝日新聞 (1995年7月5日付) p.23.
- 朝日新聞 (2008年6月21日付) 男子世界ランキング1位ラファエル・ナダル談. p.20.
- 朝日新聞 (1982年1月25日付) p.18.
- 朝日新聞 (1987年12月12日付) p.17.
- 朝日新聞 (1982年12月2日付) p.17.
- 朝日新聞 (1983年10月26日付) p.3.
- 朝日新聞 (1995年7月2日付) p.22.
- 朝日新聞 (1995年6月28日付) p.22.
- 朝日新聞 (1995年1月23日付) p.21.
- 朝日新聞 (1996年9月30日付) p.26.

- 朝日新聞 (2004年11月13日付) p.13.
- 朝日新聞 (2005年5月18日付) p.2.
- 浅見高明 (1983) 運動生理学概論. 宮下充正、石井喜八編著. 大修館書店: 東京、p.164.
- Gallahue D.L., Ozmun J.C and Goodway J.D. (2010) Understanding motor development-infants,children,adolescents,adults. McGraw-Hill Humanities: U.S.A, pp.185-248.
- 橋本公雄 (2012) スポーツ・ドラマチック体験 ー体験がもたらす影響を考えるー中編 スポーツドラマチック体験とポジティブ特性. コーチングクリニック, 26 (12): 26-29.
- 岸本みさこ (2009) 幼児期の運動遊びー理論と実践ー. 高木信良編. 不昧堂出版: 東京, p.18.
- 木塚朝博 (2010) 見ながら動き考えながら動く. 子どもと発育発達, 7 (4): 229-234.
- 小林寛道ほか(1990) 幼児の発達運動学. ミネルヴァ書房: 東京, pp.100-110.
- 國本桂史 (2003) 子どもが熱中する遊び. 子どもと発育発達 1 (3): 157-160.
- マイネル: 金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修館書店: 東京, pp.328-336.
- 三木四郎 (1990) 運動ゲシュタルトの発達. 金子明友・朝岡正雄編. 運動学講義. 大修館書店: 東京, pp.118-120.
- 宮下充正 (2010) 子どものときの運動が一生の身体をつくる. 明和出版: 東京, pp.83-116.
- 宮丸凱史 (1986) 子どものスポーツ適正ー幼少年期の運動発達と望ましい運動経験ー. J.J.Sports.Sci, 5 (4): 221-227.
- 日本テニス協会編 (2005) テニス指導教本. 大修館書店: 東京, p.67.
- 大橋二郎 (1991) サッカーにおけるトップアスリートの技術を支えるもの. 体育の科学, 41 (4): 269-273.
- 滝口隆司 (2005) スポーツ英才教育に潜む危険性. 現代スポーツ評論, 12: 28-41.
- 吉田伊津美 (2008) 幼少年期の運動遊びの留意点. 子どもと発育発達, 5 (4): 204-207.
- 吉野篤志・杉山充宏 (2007) 野球選手の体格・体力及び運動能力の発達的特徴. 愛媛大学教育学部紀要, 54 (1). 149-155.

2015年6月17日受付

2016年3月3日受理